

ある歴史小説を読んで

樺山 敬彦

歴史小説や時代小説を読むのが好きであり、中でも司馬遼太郎氏の「坂の上の雲」は、今までに何回か読み、読むたびに新たな感銘を受けている。

伊予の国松山出身の秋山好古、真之兄弟の物語形式で書かれているが、私にとっては、特に日露戦争を、秋山兄弟をはじめ当時の日本人がどのようにして戦い、まさに九死に一生を得る思いで勝利を得た、そのプロセスが興味深い。

私の友人で、旧制中学時代の同窓生で KI という人がいた。彼は東北大名誉教授で、専門は国際政治学であった。第 2 次世界大戦で海軍少尉として参加し、昭和 19 年 10 月のフィリピン沖海戦で、戦艦武蔵に乗り、米軍航空機 228 機の攻撃を受け沈没したが奇跡的に助かった人である。彼は、海軍関係の著書も多く、司馬遼太郎氏とも親しかったとの事である。彼が司馬遼太郎氏を自宅に始めて訪問したとき、丁度、司馬氏は「坂の上の雲」を執筆中であり、玄関から廊下、書斎まで海軍関係の史料が山と積まれ、足の踏み場もないぐらいで、圧倒されたと言っていたことがある。

「日露戦争は日本の侵略戦争の始まりであった」と述べるマスコミ、文化人は多いが、私にはとてもそのようには思えない。日本が戦争を決意したのは、当時、ロシアが旧満州（黒竜江省、吉林省）、遼東半島を占領し、さらに朝鮮北部をも侵略しつつあり、日本がまさに危殆に瀕したからである。もし日本が日露戦争に負けていたら、旧満州、遼東半島、北朝鮮、韓国はロシア領土となっていたのは間違いないことである。

司馬氏によれば、当時、首相経験者であり、日本政界の実力者であった伊藤博文は、「陸軍も海軍も日本が確実に勝つ見込みをなんら持っていない。しかしことここに至れば国家の存亡を賭して戦うほか道はない。もし日本陸軍が満州の野で壊滅し、ロシア軍が日本に上陸する事になれば、自分も銃をとり、砲火の中で死ぬつもりである」と身近な人に語ったということである。当時、日本の陸海軍の首脳・政財界人をはじめ、世界の人々の 99% 以上は、当時、日本に 10 倍する世界最大の陸軍を有し、大海軍を有するロシアを相手にして、極東の弱小国日本の勝利を信ずる人はいなかったのである。

日本勝利の原因は、いろいろ考えられるが、日本国民の総てが勝利のために死力を尽くした事、さらに国家戦略即ち「戦争初期において勝利を重ね、外国よりの資金調達を容易にし、時機を見て第三国の仲介で講和に持ち込む」との戦略が達成できた事であらう。

「坂の上の雲」を読むと感動的な場面が多い。例えば、連合艦隊に出撃命令が下り、艦長、参謀約 50 人が旗艦三笠の長官室に集まり、東郷司令長官より出撃命令が伝えられたとき、満座たれひとりとして顔を上げ、声を発するものはいなかった、まるで深山のような静けさであったとのことである。彼らは皆、日本存亡の崖ぶちに立っている、敗者の恥は決して受けたくないとの思いであったろう。その後東郷長官の乾杯により、気分は一転し、歓声沸くという雰囲気になったとのことである。